

2025年度 研究成果報告書

所属機関名	東京女子大学
申請者氏名	大家 まゆみ
分担者氏名	本多佐保美
研究課題名	雅楽師と協働で開発する音楽と古典の教科横断的な授業デザイン



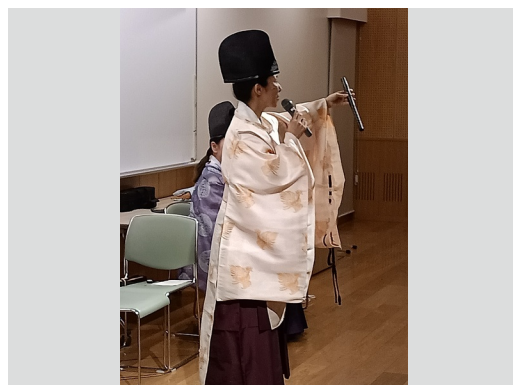
生徒に笙の説明をする中村華子氏



装束に身を包んだ『雅楽三昧 中村さんち』の演奏家3名



生徒に簞簞の説明をする中村仁美氏



生徒に龍笛の説明をする中村香奈子氏

【研究の概要】

本研究は、古典文学・香文化・雅楽・現代音楽を往還させる教科横断的授業デザインを構築し、古典を「遠い過去の言語」ではなく、文化の持続可能性を支える現代的資源として再定位することを目的とした。現代の中高生、特に理系コースの生徒は古典を生活世界から乖離した学習対象として捉え、学習意欲の低下が課題となっている（大家・中嶋・井, 2023）。そこで本研究では、①香文化を中心に『源氏物語』を扱う体験型学習、②古典の授業で『枕草子』『笛は』を扱い、総合的な学習の時間に『雅楽三昧 中村さんち』による雅楽三管の生演奏と和楽器体験を結びつける教科横断的授業、③雅楽の歴史・音響・旋法を学び、武満徹『秋庭歌』の生演奏を鑑賞し、即興演奏する音楽科授業の三部構成を設計した。香材の調合、雅楽三管の生演奏・体験、越天楽の唱歌、現代雅楽の鑑賞、生徒による雅楽的旋律の創作を通して、古典文化の国際性・身体性・創造性を総合的に理解する学習環境を構築した。さらに、古典教育・音楽教育・総合的な学習の時間を連携させ、古典文化を体験的に理解し、文化の持続可能性を自らの学びとして捉える教育モデルを提示した点に本研究の意義がある。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

本研究は、現代の中高生が古典を「自分の生活世界から遠いもの」と捉え、学習意欲を高めにくいという課題に対し、古典文化を香文化・雅楽・現代音楽と往還させることで、古典を身体的・感性的に理解する新たな授業デザインを構築した点に大きな特色がある。大家・中嶋・井（2023）の調査では、理系高校生の58%が古文を好きではなく、69%が得意ではないと回答しており、古典が「現代社会と隔絶した世界」として認識されていることが学習意欲の低下に直結している。本研究は、この構造的課題に対し、古典文化の国際性・身体性・創造性を体験的に理解する学習環境を構築することで、古典への回帰（Return to Classics）を教育的に再定義した。

第一部では、平安貴族文化における香の象徴性を、香材の観察・調合・文香づくりという体験的学習によって理解した。沈香・白檀・丁子などの香材はインド・東南アジア・アラビアを起源とし、唐代長安の国際的交易網を経由して日本にもたらされた「唐物」である。香文化は国際性・希少性・身分性を帯びた複合文化であり、『源氏物語』における香の描写は人物の教養・美意識・身分を象徴する。本研究では、香材の五味分類・軽重分類を学び、和歌の情景を香りに翻訳する文香づくりを行うことで、文学的象徴を身体感覚として理解する学習を成立させた。スウェーデンの留学生との協働による香づくりは、香文化の国際性を体験的に理解する契機となった。

第二部では、『枕草子』『笛は』の精読と雅楽三管（筆簫・龍笛・笙）の生演奏を結びつけ、古典に描かれる音の美意識を身体的に理解する授業を実施した。筆簫の「かしがましさ」、龍笛の「遠うより聞ゆる」音響、笙の倍音場の広がり、『雅楽三昧 中村さんち』による筆簫・龍笛・笙の生演奏で提示した。特に龍笛をホール外から吹きながら入場する演出は、清少納言の描写を千年の時を超えて再現するものであり、生徒は古典の語彙と実際の音響体験を照合しながら「をかし」の感性を身体的に理解した。級長・副級長が代表して筆簫・龍笛・笙を体験して会場は大いに盛り上がった。また、越天楽の唱歌では、拍の伸縮・間・非同期性といった雅楽固有の音響構造を体験し、古典文学・雅楽・身体感覚が統合された学習が成立した。

第三部では、雅楽の歴史的成立・音響構造・旋法体系を学び、武満徹『秋庭歌』を『雅楽三昧 中村さんち』の生演奏で鑑賞し、即興演奏をする音楽科授業を実施した。雅楽は唐・高麗・林邑などの外来文化を受容し、日本の美意識の中で再編成された国風文化の象徴である。Malm（1990, 2000）が指摘するように、唐楽は中国固有の音楽ではなく、長安の国際的文化環境を背景に形成された多文化的複合体系であり、日本が受容した時点で既に国際的音楽文化の集積であった。本研究では、律・呂の数学的原理、十二律、五音七声、六調子を学び、雅楽の音響構造を体系的に理解したうえで、武満徹『秋庭歌』が雅楽の音響思想（倍音構造・非同期性・間）を抽象化し、現代音楽の語法で再構成した「現代雅楽」であることを学習した。

さらに、生徒が作曲した「雅楽らしい節」を専門家が即興演奏する活動を通して、雅楽の即興性（塩梅・音程の揺れ・空間的運動性）を体験的に理解した。TASモデル（Teacher-Advisor-Supporter）に基づき、教師・専門家・演奏家が協働することで、生徒が自力では到達し得ない高度な音響理解へと導かれた。本研究は、古典教育・音楽教育・総合的な学習の時間を連携させ、文化の持続可能性を体験的に理解する新たな教育モデルを提示した。

2. 今後の研究の見通し

今後の研究では、本研究で構築した「古典文化の体験的理解モデル」をさらに拡張し、古典文化を文化的持続可能性の観点から再定位する教育体系を構築することを目指す。第一に、国語科（古典）と音楽科の教科横断的授業を体系化し、古典文学に描かれる音楽・儀礼・身体性を音響的・身体的に再現する授業案を開発する。『枕草子』『源氏物語』に描かれる音楽場面を、雅楽三管の生演奏と結びつけることで、古典の情景を身体で理解する学習をさらに深化させる。特に、龍笛の空間的運動性や筆簫の塩梅、笙の倍音場を古典の語彙と照合しながら学ぶことで、古典の言語表現が身体感覚へと転換される学習を体系化する必要がある。

第二に、香文化・雅楽・古典文学・現代音楽を統合した総合的な学習の時間を構築する。香文化は、平安貴族文化において音楽・舞踊・文学と密接に結びついた感性文化であり、香りの鑑賞は身体感覚を媒介として文化的意味を読み解く行為である。香材の調合・文香づくりを古典学習と連動させることで、文学的象徴を身体的に理解する学習をさらに発展させる。また、香文化が唐代長安の国際的文化環境を背景に形成された多文化的複合体系であることを踏まえ、古典文化の国際性を理解する学習を構築する。

第三に、東西の伝統芸能を比較・統合する新たな教育モデルを構築する。雅楽とスペインのフラメンコは、口伝・身体性・即興性・反復練習という共通の構造を持ち、伝統文化の身体性を理解するための比較素材として高い可能性を持つ。雅楽の「間」「非同期性」「音色中心の構造」と、フラメンコのコンパス（周期的リズム）・身体的アクセント・声の表現を組み合わせ、古典文学の場面を身体化する創作音楽・創作舞踊の学習を構想している。これにより、古典文化の身体性を国際比較の視点から理解する学習が可能となる。

第四に、TASモデル（Teacher-Advisor-Supporter）を拡張し、教師・専門家・演奏家・文化実践者が協働する学習共同体を構築する。伝統文化の継承には、身体技法の伝達と音響思想の理解が不可欠であり、専門家の協働は学習者の「発達の最近接領域」を広げる効果を持つ。雅楽三昧との協働を継続しつつ、国語科・音楽科・総合的な探究の時間を連携させたカリキュラムを体系化し、中学校・高校を通じた伝統文化教育の枠組みを整備する。特に、古典文化の創造的継承を可能にする学習環境を整備し、生徒が古典文化を未来へつなぐ担い手としての自覚を育むことを目指す。

最後に、古典文化の持続可能性を教育の中心に据え、文化の担い手としての自覚を育む学習モデルを構築する。古典文化は、外来文化の受容と再編成によって成立した創造的営みであり、現代においても新たな文化創造の源泉となる。本研究の成果を踏まえ、古典文化の未来に向けた教育モデルをさらに発展させ、文化の持続可能性を支える教育的営みとして位置づけることが求められる。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

Oie, M. (in press). Creative Gagaku-Making in Junior high schools: Integrating tradition, technology, and collaborative Learning. *International Journal of Creativity in Music Education*, 13.

中嶋静香・大家まゆみ・菅宮恵子（2026）. 高等学校古典教育におけるICT 活用の可能性 -源氏絵を媒介とした『源氏物語』授業の理論と実践- 教職・学芸員課程研究, 5, 52-63.

榎本深雪・本多佐保美・大家まゆみ（2026）. 中学校における創作活動を取り入れた日本音楽の授業の検討—雅楽《越天楽》および武満徹《秋庭歌》をもとにした創作指導の提案— 日本音楽教育学会第57回大会（東京学芸大学）発表予定

Oie, M., & Tsubonou, Y. (Eds.). (in press). Creative music making in Asia: Global structures for meaningful expressive experiences (Palgrave Studies in Creativity and Culture). Palgrave Macmillan.